

東京アマデウス合唱団
第19回定期演奏会

J. G. Rheinberger
“Stabat Mater,”

Tokyo Amadeus Chorus

'99 10/23(土)
石橋メモリアルホール

ご 挨拶

今宵は、お忙しい中をご来場いただき、団員一同厚くお礼申し上げます。

東京アマデウス合唱団は、1980年の創立以来、モーツァルトのほか古典派の作品を中心にほぼ毎年1回の定期演奏会を行ってまいりました。

今回で19回目の定期演奏会を開催する運びとなりましたことは、毎回続けてご来場を頂いております方々に支えられ、加えて、本日もご来場の皆様方からの暖かいご支援を頂いたお陰であり、団員一同心から感謝いたしております。

本日は、日本では演奏実績の少ないミハエル・ハイドンのミサとラインベルガーのスタバトマーテルの2曲に、ブルックナーの作品を加え古典派からロマン派への展望を試みることにいたしました。

本年は、昨年並みの人数で演奏することとなってしまいましたので、伴奏の規模は小さくしましたが、特にラインベルガーのスタバトマーテルについては、ポジティブオルガンではなく足鍵盤付きのパイプオルガンを使用し、本来の形でもう一度演奏したいと思っている曲であります。

演奏会の費用や人員と練習時間の確保には、相変わらず苦労しておりますが、指導者の熱意と団員皆の努力により、本日の本番を迎えることができることとなり、団員の一人一人が精一杯力を出し切って今回の演奏会を成功させたいと思っております。

本日は、暖かいご声援と共に演奏をゆっくりお楽しみ下さい。

1999年10月23日

東京アマデウス合唱団
団 長 柿 沼 哲

— The Program —

第1ステージ.....

オルガン独奏

Johann Georg Albrechtsberger (1736-1809)

ヨハン ゲオルク アルブレヒツベルガー

Praeludium d-Moll op.Ⅲ/4

「前奏曲」

合 唱

Michael Haydn (1737-1806)

ミヒャエル ハイドン

Missa Tempore Quadragesimae MH.553

「四旬節用ミサ」

第2ステージ.....

合 唱

Joseph Anton Bruckner (1824-1896)

ヨーゼフ アントン ブルックナー

Motetten

ベルギー編「宗教合唱曲選集」から3曲

- ・ Pange lingua
- ・ Graduale— Locus iste
- ・ Vexilla regis

合 唱

Joseph Gabriel Rheinberger (1839-1901)

ヨーゼフ ガブリエル ラインベルガー

Stabat Mater

「スタバト・マーテル」

Johann Georg Albrechtsberger

古典派の作曲家Albrechtsbergerは、1736年2月3日ウィーンで生まれ、7歳でKlosterneubergのアウグスティノ修道院の少年聖歌隊員に成ってオルガン、通奏低音、作曲を学び始め、1749年から1754年にかけてMelk修道院に居てJoseph Weissなどにオルガンと作曲を学び、1755年にはイエズス会セミナリオ、1765年11月からSilesiaのNeissen男爵にオルガニストとして仕え、1772年カルメル会修道院の合唱指揮者兼宮廷オーケストラのオルガニスト、1791年W.A.Mozartの後任として聖Stephen大聖堂の楽長Leopold Hofmannの下で副楽長を務め、2年後楽長に昇任して以後1809年3月7日世を去るまで務めた。その間、非常に才能のあるオルガニストとしてMozartの高い評価を受け、また教育者としても評判が高かった。J.Haydnは彼を当時ウィーンで最も優れた作曲の教え手と称え、1794年から翌年にかけてBeethovenを彼に学ばせた。

・Praeludium 二短調 作品3の4

Albrechtsbergerには278曲の鍵盤作品があるが、この短い前奏曲は1800年以前に作曲された12曲の前奏曲と1曲のフーガから成る、オルガン又はクラヴサンのための曲集に含まれるものである。冒頭に提示される下降の短三和音の分散音で組み立てた主題モチーフと、それを十六分音符の三連音または八分音符で展開させた長い下降フレーズ、そしてモチーフに戻るための音形を様々に変えた上昇フレーズとから成り、キリストの受難をイメージしたと思われる罪とともに覚える深い悲しみを描き出している。

Michael Haydn

M.Haydnの作品は、すでにこの合唱団がA.Mozartの作品とともにしばしば取り上げて来た。1737年9月14日オーストリアのRohrauで幼児洗礼を受け、Joseph Haydnの弟として誕生が記録される。1745年St.Stephen教会のカテドラル聖歌隊に入り、音楽の基礎をこの時代に学んだ。1757年にハンガリーのGrosswardeinの司教のもとで楽長に就任、1763年26歳の時L.Mozartの後任としてSalzburgの大司教Sigismund Schrattenbachの楽団首席奏者となり、1777年同地の聖三位一体教会のオルガン奏者に就任、1781年からW.A.Mozartの後任としてSarzburgの大司教Hieronymus Colloredoのもとで宮廷及び大聖堂の楽長になり、1801年から2年に掛けてフランスの占領を避けてウィーンへ逃れるが、1806年8月10日Requiemを作曲中に倒れるまでほとんどSalzburgを離れなかった。

・Missa Tempore Quadragesimae (四旬節のミサ) MH553

M.HaydnはMozart家との関係が深く、Requiem K626(1791)が彼の1771年大司教Sigismundの告別式のために作曲したRequiemと驚くほどよく似ている事は知られているが、この1794年の四旬節(3月6日)のために書かれたミサ曲にもCredoの後半の《et unam sanctam catholicam et apostolicam Ecclesiam》の部分のソプラノにMozartのK.626とほぼ同じ旋律が現れるほか、全体にMozartの曲風と非常に近いものを感じさせる。四旬節は、灰の水曜日から聖木曜日の主の晩餐のミサまで続く40日間の復活祭の準備の季節を指し、日曜日を除いて考えて、ラテン式典礼では復活祭の日曜日まで続けられる。罪の償いという性格を持っていて、復活徹夜祭に行われる入信式の準備、とりわけ洗礼志願期の教話と典礼の充実化とに関係している。この作品はその四旬節のミサの定例に従ってGloriaが省略されている。

Joseph Anton Bruckner

ロマン派後期の交響曲の作曲家として名高いBrucknerは、Mozartの死後30年以上を経て1824年9月4日オーストリアのLinzに近いAnsfeldenで地元の学校の校長兼オルガニストの息子として生まれた。早くから母親が聖歌隊に所属している教会の音楽に接し、従兄弟のJohann Baptist Weissの許で和声を学ぶ。その当時Linzの大聖堂でMozartのミサ曲やHaydn兄弟の曲を初めて聴いて作曲を試み、彼の最初のPange Lingua WAB31が書かれる。その後1845年から聖Florian修道院の筆頭助教を務め、その初期にTantum ergoが7曲書かれる(WAB32、41、42、43)。1851年12月から聖Florian修道院のオルガニスト、1855年12月からLinz大聖堂のオルガニストに就任し、13年間をここで過ごす間にRichard WagnerのTannhäuserのスコアをOtto Kitzlerと二人で研究するなど、Kitzlerに学ぶことによって作品にも成熟を見せ、ミサ曲二短調WAB26(1864)などにその成果が現れ始めていた。

Ludwig Berberich編「宗教合唱曲選集」より

・Pange lingua et Tantum ergo WAB33

このPange linguaはミサ曲へ短調WAB28を作曲中1868年1月31日に完成したもので、この曲の目的である4月の聖霊降臨の祝日から8日後の木曜日までまだかなりあるうちに作られたが、実際には使用されなかったのか、1885年にMusica Sacraに掲載されて存在が知られるようになった。初演は作曲後22年を経た1890年8月18日である。グレゴリオ聖歌の1.5.6節を歌詞として使用し、旋律の基礎に原曲を活かしながらフリギア調（教会旋法の一つでホを終止音とする）の旋法によって神秘的にかつピアニッシモからフォルティッシモまで使う変化に富む和声でコラール風にまとめている。

・昇階唱 Locus iste WAB23 ハ長調

1869年、Brucknerは前年秋からウイーン音楽院で教鞭を執っていたが、8月11日夏の休暇でLinzに滞在中この曲を完成した。同年9月29日にLinzの新しい大聖堂の献堂式が行われた際、彼のホ短調ミサ曲WAB27が作曲者自身の指揮で演奏される際に挿入して使われる筈であったが、初演は1か月遅れて10月29日に別人の指揮で同じ大聖堂で行われた。歌詞は献堂式用昇階唱聖歌の前半だけを採り、《Locus iste a Deo factus est》が初めと終わりに祈りを促すように静かに印象的に強調され、「(人知の)はかり難き不思議」《inæstimabile sacramentum》の部分でダイナミックな緊張の高まりをクレッシェンドで表している。

・讃歌 Vexilla Regis prodeunt WAB51

この曲は1892年2月9日に書かれ、3月31日聖金曜日に聖Florian修道院の礼拝堂でBernhard Deublerの指揮で初演された。1891年1月にウイーン音楽院を辞職したBrucknerは、作曲は続けていたが体の衰えが進んでいて、初演に臨席することもできなかった。彼としては最後の典礼用の作品と成った。歌詞は受難週第1聖日の晩課に歌われる讃歌によって居り、全七節のうち1、6、7節が採られている。フリギア調風の遅い荘厳なユニゾンで始まり、それが上昇しながら加速されるとともにクレッシェンドして終止し(R. WagnerがParsifalのモチーフに使ったドレスデン・アーメンを暗示する)、転調の多いフォルテの部分に最も強調される歌詞が置かれ、ホ短調から変ホ長調への転調を経て再びフリギア調で終わる。この旋律が歌詞ごとに微妙に形を崩しながら三度繰り返され、アーメンで終わる。この曲は依頼によって書かれたのではなく、Brucknerの自主的な作品であったと言われている。

Joseph Gabriel Rheinberger

Rheinbergerは1839年3月17日ドイツとオーストリアの間に挟まれたリヒテンシュタイン侯国の首府Verduzで侯の子息の会計係をしていた家に生まれた。5歳の時から厳しいレッスンを受け、7歳の時にはVerduzの教会のオルガニストに成り、8歳の時にはミサ曲を発表するなど、早熟な才能の持ち主であった。ミュンヘン音楽院で理論、オルガン、ピアノを学び、在学中から作曲を熱心に手がけるようになり、1859年に作品1のピアノ曲を発表する。以後彼はピアノ曲よりむしろオルガン曲の重要な作曲家として知られるようになる。同じ年彼は聖Michael教会のオルガニストに就任し、1866年まで務め、Stabat Mater作品16などいくつかの宗教作品を完成した。1864年から1877年までミュンヘン合唱協会の指揮者を務め、宮廷オペラの指揮も担当した。1867年再開された音楽院でオルガンと作曲を教えるようになり、1877年にバイエルンの宮廷楽長に就任して、1884年にはベルリン王立アカデミーの会員に推された。1901年これらを辞職して間もなく、11月25日に死去した。

・Stabat Mater ト短調 作品138

RheinbergerはRichard Wagnerなどと同時代であるにも拘らず、彼らの新しい動向から離れて伝統的な性格を守り通したと言われる。しかし、この後期に出来たStabat Materは強烈な表現性にあふれて居り、彼がやはりロマン派に属することを強く感じさせる。歌詞は1306年に没したJacopone de Todiの作と伝えられたが、現在は13世紀にフランスで生まれたとするのが定説。15世紀に続唱sequentiaとして典礼の中に取り入れられ、9月15日の聖母の七つの悲しみの祝日と受難の主日後の金曜日の聖処女マリアの七つの御苦しみのミサに歌われる。グレゴリオ聖歌では全体が20節に分けられ、同じ旋律を1節ごとに繰り返すが、この曲は1~4節、5~8節、9~14節、15~17節に18、19節を別の歌詞に改めて付け、終結部20節を添えた四部分に分けている。各部分は互いにモチーフを共有し合いながら展開して居るにも拘らず、全く趣きの違う内容に成っている。悲痛な苦しみを表す重い旋律はやがて安らぎへと変わり、更にほのかな喜びへと転じ、終結部ではフーガで明確な喜びへと変わり、《paradisi gloria》を下降形で歌いながら、再び安らぎへと収束する。

(野口 碩)

東京アマデウス合唱団

ソプラノ	相澤美佐	伊藤正子	桑島加代子	辻村順子	中村美智子
	長江玲奈	村松あおい			
アルト	大久保ルミ子	加藤尚子	重泉秀子	鈴木寿見	高橋早苗
	辻 敏子	宮崎米子			
テノール	伊原 宏	片岡 繁	吉田一郎	吉田英人	
バス	柿沼 誓	野口 碩			

指揮 齋藤明生

東京芸術大学卒業、同大学院終了。芸大定期演奏会のブラームス「ドイツレクイエム」でソリストに選ばれた他、在学中から、ベートーベン「交響曲第九番」や、多くの宗教音楽のソリストを務める。1992年には独ライブ「聖トーマス教会において、H. J. ロッチュ指揮によるカンタータ」にソリストとして出演した。また在学中から在籍している芸大バハカンタータクラブでは、多年にわたり演奏委員長を務める。声楽を兵藤豪希、R. フィッシャー、Ph. フッテンロッハー、宇田川貞夫に、宗教音楽を小林道夫、兵藤豪希の各氏に師事。現在、渋谷混声合唱団の指揮者。1987年から当合唱団の指導にあたっている。

オルガン 水野克彦

東京芸術大学卒業。ピアノを滝崎鎮代子、クラリネットを千葉国夫、室内楽を細野孝興の各氏に師事。オルガンの手ほどきを今井奈緒子氏に受ける。オルガン、通奏低音のほか、合唱指導、ピアノ伴奏、作曲と幅広く活動。現在、茗荷谷キリスト教会オルガニスト。日本オルガニスト協会会員。日本オルガン研究会会員。東京三菱銀行合唱団指揮者。当合唱団練習ピアニスト。

アマデウス・アンサンブル

Vn.1 海保 あけみ

長野県松本市出身、3歳より才能教育研究会にてヴァイオリンを始める。東京芸術大学音楽学部卒業。在学中、芸大バハカンタータクラブに在籍。現在フリーの演奏家として室内楽、オーケストラ、スタジオの分野で活動中。

Vn.2 片桐 恵里

東京芸術大学卒業。同大学院修了。ヴァイオリンを掛谷洋三、浦川宣也、室内楽をルイ・グレーラー、ピュイグ・ロジェの各氏に師事。第4回埼玉県新人演奏会に出演。現在、東京ハルモニア室内オーケストラのメンバー。

Vla 深澤 美奈

1993年第3回日本室内楽コンクール入選。1995年東京文化会館新進音楽家デビューコンサート出演。1997年東京文化会館小ホールにてヴィオラジョイントリサイタルを開催。同年東京芸術大学大学院修了。これまでに、中馬敬子、浦川宣也、河合訓子、菅沼準二の各氏に師事。

Vc 伊藤 恵以子

東京芸術大学、同大学院博士課程修了。チェロを三木敬之、レーヌ・フラショー、倉田澄子の各氏、室内楽を巖本真理カルテットに師事。第48回日本音楽コンクールチェロ部門入選。1982-84年バリエコールノルマルで学ぶ。芸大在学中バハカンタータクラブに所属し、室内楽などを中心に演奏活動を行っている。また、訳書に「ポール・トルトゥリエチェリストの自画像」「メニューインとの対話」などがある。

Kb 柳澤 智之

東京芸術大学音楽学部卒業。同大学院修士課程修了。コントラバスを小室昌広、永島義男、ツォルト・ティバイ、黒木岩寿の各氏に師事。アンサンブル・コンテンポラリーα、アンサンブル・セシードのメンバー。

Missa Tempore Quadragesimae(四旬節用ミサ) MH 553 ニ短調 ミハヤエル・ハイドン作曲 1794年

1. Kyrie

Kyrie eleison. (3回復誦)
Christe eleison. (3回復誦)
Kyrie eleison. (3回復誦)

主よ、あわれみ給え。
キリストよ、あわれみ給え。
主よ、あわれみ給え。

(Gloriaは歌われない)

2. Credo (歌い出しはグレゴリオ聖歌によって導かれる)

[Credo in unum Deum,] Patrem omnipotentem,
factorem caeli et terrae,
visibilium omnium, et invisibilium.
Et in unum Dominum Jesum Christum,
Filium Dei unigenitum.
Et ex Patre natum ante omnia saecula.
Deum de Deo, lumen de lumine,
Deum verum de Deo vero.
Genitum, non factum, consubstantialem Patri:
per quem omnia facta sunt.
Qui propter nos homines,
et propter nostram salutem descendit de caeli.

[我は信ず、]全能の御父なる〔唯一の神を〕、
天と地の造り主を、
全ての見ゆるものと見えざるものの造り主を。
そして我らの主イエス・キリストを信ず、
ひとり子として生まれ給いし神の御子を。
御父よりよろずの世の前に生まれ給いし御子を。
神よりの神、光よりの光を、
まことの神よりのまことの神を。
造られずして生まれ給える、御父と一体なる君を。
全ての造られしものその君より成れり。
その君我ら人類のため、
我らの救いのために天より降り給う。

Et incarnatus est de Spiritu Sancto
ex Maria Virgine:
Et homo factus est.
Crucifixus etiam pro nobis:
sub Pontio Pilato passus
et sepultus est.

そして聖霊により受肉し給い、
処女マリアより出で、
人と成り給えり。
我らのために十字架にさえつけられ給えり。
すなわちポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、
葬られ給えり。

Et resurrexit tertia die,
secundum Scripturas.
Et ascendit in caelum:
sedet ad dexteram Patris.
Et iterum venturus est cum gloria,
iudicare vivos et mortuos:
cujus regni non erit finis.
Et in Spiritum Sanctum, Dominum,
Et vivificantem:
Qui ex Patre Filioque procedit.
Qui cum Patre et Filio simul adoratur,
et conglorificatur:
qui locutus est per Prophetas.
Et unam sanctam catholicam
et apostolicam Ecclesiam.
Confiteor unum baptisma
in remissionem peccatorum.
Et exspecto resurrectionem mortuorum.
Et vitam venturi saeculi.
Amen.

そして三日目によみ返り給えり、
聖書に従いて。
そして天に昇り給う。
即ち御父の右に座し給う。
そして栄光とともに再び来たり給わんとす、
生けるものと死せるものをさばき給うなり。
されば、その君の王権は止むこと無からん。
且つ聖霊なる主を信ず。
そして生命あらせ給う君を、
そは御父より御子にも現れ給う。
そは御父及び御子とともにあがめられ、
たたえらるるなり。
即ちそは預言者達により言い置かれし所なり。
そして一にして聖なる公教の、
且つ使徒継承の教会を信ず。
我は唯一の洗礼(バプテスマ)を認む、
罪の赦しの時に。
そして死せる者のよみがえりを望む。
併せて来らんとする世の命をも。
ア-メン。

3. Sanctus-Benedictus

Sanctus, Sanctus,
Sanctus Dominus Deus Sabaoth.
Pleni sunt caeli et terra gloria tua.
Hosanna in excelsis.

聖なるかな、聖なるかな、
聖なるかな、万軍の主なる神。
汝の栄光天地に満てり。
いと高き所にホサナ(歓呼の言葉)。

Benedictus qui venit in nomine Domini.
Hosanna in excelsis.

ほむべきかな、主の御名によりて来たる者。
いと高き所にホサナ。

4. Agnus Dei

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
Agnus Dei: miserere nobis.
(3回復誦)

世の罪を除き給う神の小羊。
神の小羊よ、我らを憐れみ給え。

* * * * *

Pange lingua et Tantum ergo WAB33 アントン・ブルックナー 1868年作曲
(ルドウィッヒ・ベルバーリヒ編「宗教合唱曲選集」3)

(無伴奏四声合唱 五声の部分を含む)

Pange lingua gloriosi corporis mysterium
sanguinisque pretiosi,
quem in mundi pretium
fructus ventris generosi,
rex effudit gentium.

舌よ、誉れある御体の秘蹟を頌しまつれ、
血を流し給い、それゆえに尊き秘蹟を。
この世の贖い代として
とうとき御腹の産み給いし御子、
もろびとの王これを捨て給えるほどの尊き秘蹟を。

Tantum ergo sacramentum veneremur cernui,
et antiquum documentum novo cedat ritui:
praestet fides supplementum
sensuum defectui.

かく大なる秘蹟を、そのゆえ我らひれ伏して敬いまつる、
そして、古き戒めを去りて新なる礼拝の方式に移りゆく、
信仰が助けを授けんことを
感覚のにぶきに。

Genitori genitoque laus et jubilatio,
salus honor virtus quoque sit et benedictio,
procedenti ab utroque compar sit laudatio.

御父にも御子にも賛美と歓びの声、
幸い、誉れ、権能のみならず、祝福も有らんことを、
両者より現れしものに同じ賛美の有らんあことを。

Graduale (昇階唱) WAB23 ハ長調 アントン・ブルックナー 1869年作曲
(ルドウィッヒ・ベルバーリヒ編「宗教合唱曲選集」4)

(無伴奏四声合唱)

Locus iste a Deo factus est
inaestimabile sacramentum
irreprehensibilis est.
Locus iste a Deo factus est.

この場所は神により造られしなり、
はかり難き不思議にて
難すべきところ無し。
この場所は神によりて造られしなり。

Vexilla regis WAB51 アントン・ブルックナー 1892年作曲
(ルドウィッヒ・ベルバーリヒ編「宗教合唱曲選集」10)

(無伴奏四声合唱 五声の部分を含む)

Vexilla regis prodeunt
fulget crucis mysterium
quo carne carnis conditor
suspensus est patibulo.

王の御旗、進み来る、
十字架の奥義輝きを放つ、
それゆえに肉によりて肉の欲をつのらすものは
磔刑の木に高く架けらる。

O crux ave spes unica
hoc passionis tempore
auge piis justitiam
reisque dona veniam.

おおようこそ、十字架。唯一の望みよ。
この受難節に
信仰深き者に義を増し加え、
然らぬ者にも赦しを給え。

Te summa Deus Trinitas
collaudet omnis spiritus
quos per crucis mysterium salvas
rege per saecula. Amen.

いと高き神にして三位一体なる汝を
諸々の魂ごぞりてほめまつらんことを、
十字架の秘儀によりて救い給うそれらを、
代々にわたりて、治め給え。アーメン。

1. Stabat Mater dolorosa (ト短調)

- (1)
Stabat Mater dolorosa,
juxta crucem lacrimosa,
dum pendebat filius.
- 悲しめる御母はいつまでも佇みありき、
十字架の傍らに涙に暮れて、
御子の架かれる間。
- (2)
Cujus animam gementem,
contristatam et dolentem
pertransivit gladius.
- 彼女の、黯然として悲しみ迫り、悩みつつ、
嘆ける魂を、
剣、これを貫けり。
- (3)
O quam tristis et afflicta
fuit illa benedicta
mater unigeniti!
- ああ、いかばかり悲しみ、打ち砕かれしか、
かの祝福されし、
御ひとり子の御母は！
- (4)
Quae maerebat et dolebat,
pia mater, dum videbat
nati poenas inclyti.
- 彼女は嘆き悲しみ、悩みてありき、
慈愛深き御母よ、
人目にさらされし御子の苦しみを眺め居りし間。

2. Quis est homo (変ホ長調)

- (5)
Quis est homo qui non fleret,
matrem Christi si videret
in tanto supplicio?
- 誰か悲しまざる者あらんや、
キリストの御母の
かほどの哀願の苦しみにあるを見なば？
- (6)
Quis non posset contristari,
Christi matrem contemplari
dolentem cum filio?
- 誰か黯然たらざるを得んや、
キリストの御母の、御子とともに
苦しめるをつぶさに見らるるは？
- (7)
Pro peccatis suae gentis,
vidit Jesum in tormentis,
et flagellis subditum.
- おのが民の罪のために
拷問の責め苦のうちに在りて
笞の下に置かれ給うイエスを眺め居給いき。
- (8)
Vidit suum dulcem natum
morientem desolatum,
dum emisit spiritum.
- おのが愛する御子の
見捨てられ死にゆくも眺め居給いき、
御魂を手放し給いしとき。

3. Eja Mater fons amoris (ト短調-ト長調 複合唱によりバストラール風に歌われる)

- (9)
Eja mater, fons amoris,
me sentire vim doloris fac,
ut tecum lugeam.
- いざ、愛の泉なる御母よ、
我に痛みのいかほどなるを気づかしめ、
汝と共に悲しむようになし給え。
- (10)
Fac, ut ardeat cor meum
in amendo Christum Deum,
ut sibi complaceam.
- 我が心を燃ゆるが如くなし給え、
神なるキリストを愛することにおいて、
彼の御心にかなうべく。

(11)
Sancta mater, istud agas,
crucifixi fige plagas cordi meo
valide.

聖なる御母よ、この如きものも導き給え、
十字架に打ち付けしその傷を我が心に刻み、
力を与え給え。

(12)
Tui nati vulnerati,
tam dignati pro me pati,
poenas mecum divide.

汝の御子の傷つけられ、
かくまで我がために心を定めて耐え給いし
責め苦を我と分ち給え。

(13)
Fac me tecum pie flere,
crucifixo condolere,
donec ego vixero.

我を汝と共に深き愛をもて悲しみ泣き、
十字架につけたる事に痛みを覚えしめよ、
我が生くる限り。

(14)
Juxta crucem tecum stare
et me tibi sociare
in planctu desidero.

十字架の傍らに汝と共に立ち、
声をあげて泣くとき我を汝に結合せしむるを
ひたすら望む。

4. Virgo virginum praeclara (妻木長調)

(15)
Virgo virginum praeclara,
mihi jam non sis amara:
fac me tecum plangere.

処女のうちのすぐれし処女なる聖母の君よ、
我をもはや疎み給うことなかれ、
我を汝と共に声をあげて泣かしめよ。

(16)
Fac, ut portem Christi mortem,
passionis fac consortem
et plagas recolere.

キリストの死を帯び、
御受難の連帯者となして、
打ち傷を思い起こさしめ給え。

(17)
Fac me plagis vulnerari,
fac me cruce inebriari,
et cruore Filii.

我を打ち傷にて傷を負わしめ給え、
十字架に酔わしめ、
御子の血潮に浸らしめ給え。

(18)
Inflammatum et accensum
per te, virgo, sum defensum
in die iudicii.

火をつけられ、焼かるるとき、
処女なる聖母の君よ、願わくば汝によりて守られんことを、
審判の日に。

(19)
Fac me cruce custodiri,
morte Christi praemuniri,
confoveri gratia.

十字架に守られ、
キリストの死にて我が行く手を固められ、
恩寵によりて慈しまるるようになし給え。

(20) (終曲7ーガ 妻木長調)
Quando corpus morietur,
fac, ut animae donetur
paradisi gloria.

肉の体の死ぬるとき、
魂に天国の
誉れの与えらるるようになし給え。

(翻訳文責：野口 碩)



1981 February Mozart :RÈQUIEM
1981 November Händel :MESSIAH
1982 November Fauré :RÈQUIEM
1983 September Mozart :KRÖNUNGS MESSE
1984 September Mozart :RÈQUIEM
1985 October Bach :KANTATE Nr.106
1986 October Mozart :GROSSE MESSE
1987 October Schütz :MUSIKALISCHE EXEQUIEN
1988 December Mozart :VESPERAE
1989 November Mozart :RÈQUIEM
1991 February Mozart :LITANIAE
1991 November Mozart :DOMINICUS MESSE
1992 Nov. Charpentier :MESSE DE MINUIT POUR NOËL
1993 November Mozart :MISSA BREVIS
1994 November Mozart :RÈQUIEM (JOINT CONCERT)
1995 October Bach :KANTATE Nr.182
1996 November Mozart :VESPERAE
1997 October Mozart :MISSA SOLEMNIS
1998 October Bach :KANTATE Nr.61
1999 Oct. Rheinberger :STABAT MATER

合唱団員募集

東京アマデウス合唱団では次回演奏会に向け、団員を募集しています。
音楽を愛する方なら経験は不問です。練習は毎週水曜日18:30~21:00、
営団地下鉄東西線神楽坂駅近くの「聖バルナバ教会」で行っています。
入団費は1,000円、団費は月4,000円です。学生割引有り(他に楽譜代など)
合唱に興味をお持ちの方、是非お越しください。見学も歓迎です。

お問い合わせ:03(3960)7714・大久保、048(476)4056・辻村